

難民・移民の排斥、 ヘイトスピーチ(差別扇動)に反対します ～戦争とテロと差別を止めよう～

11月29日(日)に、全国各地の7ヶ所(札幌、仙台、大宮、名古屋、大阪、広島、福岡)で、「移民・難民の受け入れ反対」を名目とした、ヘイトスピーチ(差別扇動)デモや街頭宣伝が行われます。主催は「行動する保守運動」で、その実体は「在特会(略称)」です。京都の朝鮮学校を襲撃し、これまで数えきれないほどのヘイトスピーチ・デモや街宣を行なってきました。今回も同様に政治的主張を装って行われる、差別・排斥を目的としたヘイトスピーチに反対します。

彼らは10月に、トルコ大使館での在外投票時に起きた、在日トルコ人とクルド系トルコ人の乱闘を例に挙げ、移民・難民の受け入れ反対を主張していますが、当事者からは「非常に残念」「争うつもりはない」「お詫びしたい」というメッセージが出ています。一時の混乱を理由に受け入れに反対する事は偏見に他ならず、反対するための口実に利用しています。

ここ最近のヘイトスピーチ・デモや街宣などで使用されていた、1枚のイラストがあります。実在の難民少女をモデルにし、「そうだ、難民しよう!」などの文章と共に、ある「イラストレーター」が、ネット上で公開したものです。このイラストは国内外で広く報道され、多くの批判が寄せられました。stepFEEDという海外のサイトは、「**シリア難民問題へ最悪のリアクションを起こした七人**」の一人に選出しました。「偽装難民を批判しただけで難民自体を侮辱する意図はなかった」という主旨の釈明をしていますが、これはごく一部の不正受給を根拠に生活保護受給者をバッシングするのと同じ構図です。そして、在日コリアンへの差別や偏見を煽る内容のイラストも描き、こちらもまたネットだけでなく、デモや街宣で差別の扇動に利用されています。

11月13日にフランスで同時多発テロが起きました。事件後のフランスや欧米では、テロと難民・移民問題を安易に結びつけ、難民や移民、ムスリム(イスラーム教徒)に対する差別や迫害が相次ぎ、排斥しようとする動きも出ています。ですが、**難民のほとんどは戦乱やテロから逃れるために故郷を脱出した人々**であり、ムスリムをテロを行なったとされているIS(イスラミック・ステート)と同一視することも誤りです。

今、世界の難民は6000万人を超えていました。日本は「難民の地位に関する条約(難民条約)」に加入しているため「難民を保護する国際的な義務と責任」を負っています。しかし2014年に、日本に難民申請した約5000人の内、難民として認定されたのはわずか11件(約0.2%)しかなく、国際的に見てもかなり低いものです。また、入国管理局による難民申請者への人権侵害も多数報告されています。国連難民高等弁務官からは、難民の受け入れ制度の改革を求められ、国連の各委員会からも同様の勧告が出されています。難民を受け入れるためにには、人権侵害が起きている今の制度を改め、安心して暮らせる環境を整える事が不可欠です。

そして難民を生み出した要因にも目を向ける必要があります。難民となった背景には様々な理由がありますが、日本も決して無関係ではありません。「同盟国」のアメリカが行なったイラク戦争への参加や、大国による「軍事介入」もその理由となっているからです。日本では「安保法案」が強行可決されましたが、今後こうした「軍事介入」に関わっていく可能性も考えられ、中東研究者や国際NGOが反対声明を出しています。日本も既にテロの標的となっています。

日本が軍事によらない問題解決を図っていく事は、紛争の解決や難民支援にあたっても非常に大切です。非軍事での活動による信頼は、紛争やテロを抑止していく可能性があります。そして差別を抑止する事も、延長線上にあるテロや戦争の抑止に繋がります。

泥沼化する内戦に伴う爆撃とテロの連鎖。終わらない惨劇と憎悪、繰り返される報復を止めて、差別とテロと戦争のない世界へ。

NO WAR & NO TERRORISM

参考書籍

『難民からまなぶ世界と日本』 山村淳平[著] 解放出版社

『日本と出会った難民たち 生き抜くチカラ、支えるチカラ』 根本かおる[著] 英治出版

『難民・強制移動研究のフロンティア』 墓田桂／杉木明子／池田丈佑／小澤藍[編] 現代人文社

『「イスラーム国」の脅威とイラク』 山尾大／吉岡明子[編] 岩波書店

『終わりなき戦争に抗う 中東・イスラーム世界の平和を考える10章』 中野憲志[編著] 新評論

